

第 77 回クラシックを楽しむ会

2023 年 7 月 16 日(日)18:00~(1 時間 47 分)

タイトル : 歌劇「利口な女狐の物語」(ヤナーチェク)

会場等 : アン・デア・ウィーン劇場

ウィーン・ミュージアム・クォーター ホール E (オーストリア)

2022 年 10 月 20・22 日

楽団等 : ウィーン交響楽団

合唱 : アルノルト・シェーンベルク合唱団

指揮 : ギエドレ・シュレキエテ

演出 : ステファン・ヘアハイム

出演 : 女狐ビストロウシュカ: メリッサ・プティ

森番: ミラン・ジリャノフ

校長/ 蚊/ ラパーク(犬)/ 雄鶏(おんどり)/ キツツキ:

黄亞中(ホァン・ヤーツォン)

ほか



第 2 幕 女狐ビストロウシュカが雄狐に恋する場面

「利口な女狐の物語」作曲の経緯について

チェコの作曲家ヤナーチェク家の家政婦は、新聞が届くと主人に渡す前に台所で連載小説を愛読していて、ヤナーチェクが知るところとなった。この連載小説は当時大変な評判になっていて、家政婦は「旦那様は動物たちのことをよくご存じですよ。これはすてきなオペラになるんじゃないでしょうか」として作曲を勧めた。ヤナーチェクはその気になり資料を集めて研究し、自ら台本を書いて作曲に着手した。

ウィーン・ミュージアム・クォーター ホール E+G

ミュージアム・クォーター (MQ) はホーフブルク宮殿の西南、美術史博物館の通りを隔てた旧帝国厩舎で、世界最大級規模のカルチャーエリア。広さは 60,000 m² (参考:東京ドームは 47,000 m²弱)。2 つのコンサートホール E+G の他、玄武岩に覆われた近代美術館、レオポルト美術館など数多くの施設がある。



左がコンサートホール E+G、奥の黒い建物が近代美術館。広場には可動式のカラフルベンチ。

s porvaným týkém dohněvala se a zavolala na manžela, jenž prohlížel pozorně pastí na škodnou.

»Ty, tato, tu říkku ti vyhodím. Smrdí a zavazí všude, a děti pořád za nò spózijou. A co škodné nadějí.«

»Tož tu uvěžu.« Fekl rázně revírník a iněd učinil, jak byl pravil.

V.

Bystrouška sedí chudák u psí boudy, zalámbena, pokřesena. I Lapák se na ni přišel podívat trežky svrchu.



»Měla's ty dělat podívá mě,« povídal povyšně. »Měla's neutíkat, měla's nevyjízovat nise a nobýta bys tu vůči seděla.«



Bystrouška jen tak tak, že se nerozplakala zlostí. Zafala zuby, aby zbytečně nenadávala, protáhla se na slunko, a tváříc se, jako by se jí urážlivě napařování kohoutovo netýkalo, vyhoupla se na boudu. Schoullla se tam a napjala všekro úsilí, aby se ovládla. V hlavě jí to ovšem vřelo touhou po odvetě a kromě toho nechtělo se jí do suchých brambor, kterých jí nasypali na spínavou mísku. Slepice zatím, podněny řecí kohoutovou, uspořádalý demonstrativní průvod kolem boudy. Chocholka, slepčí bába stará, pomlouvačná, upíkaná, dívala se na ni posměšně a krákorala zlonysně.

原作となった新聞の連載小説

第 78 クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル: 喜歌劇「ペリコール」(オッフエンバック)

8 月 13 日(日) 17 時 30 分開場、18 時上映開始

歌手: マリナ・ヴィオティ、スタニスラス・ド・バルベラク他 管弦楽: レ・ミュージシャン・デュ・ルーヴル 合唱: ボルドー国立歌劇場合唱団

指揮: マルク・ミンコフスキ 収録: 2022 年 11 月 23・24 日 シャンゼリゼ劇場(パリ)。

あらすじ

【時と場所】

チェコ東部、モラヴィア地方の片田舎の森とその近くの村

【登場人物】

森番とその妻

校長、穴熊にそっくりな司祭、

行商人ハラシュタ、

居酒屋の主人パーセクとその妻、

女狐ビストロウシュカ、雄狐ズラトフシュビテーク、

森番の息子ペピークとその友達フランティーク、

森番の飼い犬ラパーク、

雄鶏と雌鶏、カエル、きつつき、蚊、

穴熊、ふくろう、かけす（カラス科の鳥）

第1幕への前奏曲。

【第1幕】

第1場 森の峡谷。夏の午後。森番が女狐を捕まえる

森番が銃を持って登場し、疲れたと言って休憩する。彼の血を吸った蚊をカエルが捕まえようとする。子供の女狐ビストロウシュカが登場、カエルを見て驚く。カエルも驚いて跳ねて森番の鼻の上に落ちる。森番が目覚まし子狐を見つけて捕まえると、子供たちの待つ家へ連れて行く。

第2場 森番の家の庭。秋の午後。

犬のラパークがビストロウシュカに説教し、言い寄るが、彼女は拒絶する。森番の息子のペピークが友達のフランティークを連れて登場し、ビストロウシュカを棒でつつき始める。彼女は怒ってペピークにかみつく。その悲鳴を聞いて飛び出してきた森番の夫妻に彼女は縛り上げられてしまう。彼女が泣いていると、雄鶏が因縁をつけてからかう。彼女はその態度と雌鶏や雛鳥の盲目的な服従に腹を立てて、「雄鶏の支配に反抗して新しい秩序を作るんだ」と演説するが鶏たちは全く理解できずむしろ嘲笑を浴びせる。激昂したビストロウシュカは雄鶏を捕まえ雛鳥たちを殺して逃げ出す。

【第2幕】

第1場 森の峡谷。夕方。女狐ビストロウシュカが穴熊の“広い家”を奪い取る

ビストロウシュカが穴熊の家に目をつける。彼女は森の生き物たちの同情をかい、うまく穴熊を追い出してしまふ。

第2場 パーセクの居酒屋。夜。校長と森番がトランプをしていて“穴熊そっくりの顔”の牧師も加わる

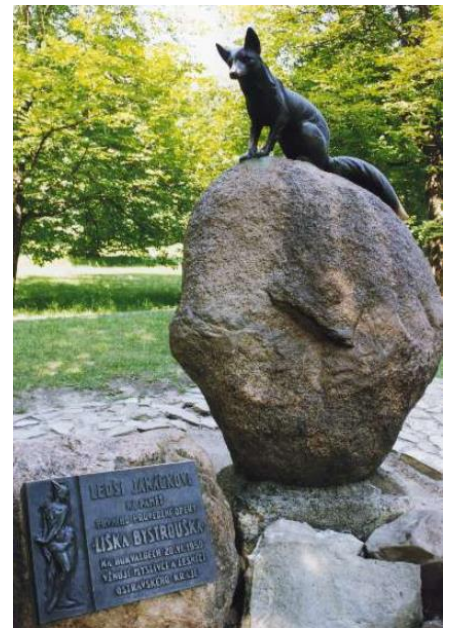
校長と司祭と森番がトランプをしている。森番が校長を片思いのことでからかうと、校長は狐の話で応酬する。校長と司祭が帰り、森番は酒を飲むが居酒屋の主人にまた狐の話をされて突然出て行く。

第3場 森の中の小径。ヒマワリの茂み。

ヒマワリの茂みからのぞくビストロウシュカを、酔っぱらった校長は片思いの相手テリンカだと思い抱きしめようと駆け出すが、ヒマワリの茂みに落ち込んでしまふ。司祭は思い出を回想している。森番は女狐を見て発砲するが弾は当たらない。

第4場 女狐の巣穴の前。夏の夜。森番が女狐ビストロウシュカを銃で撃つが、取り逃がす

ビストロウシュカの巣穴の前を通りかかった雄狐ズラトフシュビテークと彼女は恋に落ちる。雄狐は彼女を散歩に誘い、彼女は自分がひとりぼっちであること、森番にひどい目に遭わされて逃げてきたこと、うまく巣穴を手に入れたことを話す。雄狐が狩に行きウサギを持って帰ってくる。彼らは互いに愛を告白し、二人で巣穴の中に消える。翌朝、きつつきの司祭役で二人は結婚式をする。



ヤナーチェクの故郷にある「利口な女狐の物語」の記念碑

【第3幕】

第1場 森のはずれ。秋の昼間。

鶏の行商人ハラシュタが登場して民謡を歌う。森番が通りかかり、ハラシュタは今度テリンカと結婚することになったと話す。森番は狐の足跡を見つけて罾を仕掛ける。ビストロウシュカが夫や子供を連れて登場し罾に気づき立ち止まる。妻になるテリンカに狐の襟巻きをプレゼントしてやろうと思ったハラシュタは狐たちを捕まえようとする。ビストロウシュカがおとりとなって逃げ回る間に夫と子供たちはハラシュタの鶏を食べてしまう。怒り狂ったハラシュタは銃を発砲しビストロウシュカは射殺されてしまう。

第2場 パーセクの居酒屋の庭。

パーセクの妻が校長の相手をしているところへ森番が登場し、ビストロウシュカの巣穴がカラだったと話す。校長はテリンカが結婚するのでうちひしがれている。パーセクの妻はテリンカが新しい狐の襟巻きを持っていたと話す。森番は、居酒屋の陰気さに我慢ができなくなり、自分たちも年をとったんだと語り店を出て行く。

第3場 森の峡谷。日没の頃。

森の中で森番は若い頃のことを思い出している。結婚式の翌日に若い妻と二人でここに寝ころんだこと、情熱的な愛も年をとって失せてしまったこと。いつの間にか彼は眠ってしまう。ふと、彼は若い女狐に気づく。ビストロウシュカのことを思い出して今度はしっかり捕まえようとするが、捕まえたのはカエルだった。そういえばビストロウシュカを捕まえた時もカエルがいたと思い出していると、カエルが「あの時、あんたの上に落ちたのはおいらの祖父さんだったんだ」と告げる。森番は、繰り返されてゆく生命の再生、自然のサイクルに感動する。

出演



メリッサ・プティ(リリック・ソプラノ)

1990年南仏コートダジュールサンラファエル生まれ。

パリ・オペラ座、アン・デア・ウィーン劇場、ブレゲンツ音楽祭などに出演している若手歌手の一人。



黄亞忠(ホアン・ヤーツオン) (テノール)

1989年台湾生まれのテノール歌手。ベルリン・ドイツ・オペラのアンサンブルメンバー。



ギエドレ・シュレキーテ(指揮)

1989年リトアニア出身の指揮者。ゼンパーオーパー、チューリッヒ歌劇場、ライプツィヒ歌劇場、バーゼル劇場、マインツ州立劇場の他、[ヨーテボリ](#)交響楽団などを指揮している。



シュテファン・ヘルハイム(演出)

1970年ノルウェー生まれ、ドイツを拠点に活躍しているオペラ演出家。バイロイト音楽祭で絶賛された。

ヤナーチェクとモラヴィア

チェコの代表的な作曲家スメタナ、ドボルザークはチェコ西部のボヘミア地方の中心都市プラハで活躍したが、ヤナーチェクが活躍したのはチェコ東部の田舎モラヴィア地方の中心都市ブルノ。60代になってから代表作の歌劇「イエヌーフア」がプラハで上演されて大成功を収め、ヨーロッパに知れ渡ることになった。晩年に最盛期を迎えて歌劇「利口な女狐の物語」の他、声楽曲や管弦楽、室内楽曲など一連の名曲を残したが、オペラ作品が世界的に知られるようになったのは1970年代以降である。

レオシュ・ヤナーチェク(1854-1928)はチェコ東部モラヴィア地方北部の村フクヴァルディに生まれた。少年時代のチェコ(ボヘミア地方・モラヴィア地方・一部シレジア地方)はオーストリア＝ハンガリー帝国(1867-1918)に支配されていて言語はドイツ語。モラヴィア地方の中心都市ブルノで育ち、世話になった王立師範学校長の娘と結婚したが、ロシアの文化や文学を含め「汎スラヴ的な」民族主義者ヤナーチェクは、当初から妻と、「きわめてドイツ的な」親族と不仲。結婚生活は事実上破綻した。



ヤナーチェクと彼が育ったブルノのアウグスティノ会修道院(メンデルの修道院)
メンデルの法則はこの修道院で生まれた

当時のプラハでは、ヤナーチェクは民俗学者としての知識を身につけている二流の地方の作曲家とみなされていた。代表作の歌劇「イエヌーフア」はモラヴィアの村を舞台とし、モラヴィア方言で書かれた戯曲をもとに作曲されたが、プラハ国民劇場での上演は「度肝を抜くような大成功」。その後ヨーロッパ各地で上演されることになった。

晩年のヤナーチェクは、二人の子供を持つ38歳年下の既婚女性カミラ・シュテスロヴァーと出会い晩年の活動に多大な影響を与えた。

最晩年のオペラの内、3つのオペラはカミラを通じて垣間見た女性もつ3つの顔を描いた三部作。「利口な女狐の物語」は「自然な天真爛漫さ」を描いていると評されている。

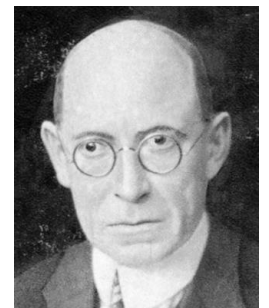
「利口な女狐の物語」原作

ヤナーチェクが住んでいたチェコ・モラヴィア地方の中心都市ブルノの新聞「リドヴェー・ノヴィニ」に掲載されていた絵物語が「利口な女狐の物語」の原作である。この絵物語はスタニスラフ・ロレクの絵にルドルフ・ティエスノフリーデクがキャプションをつけた。

画家スタニスラフ・ロレク(1873-1936)は、イラストレーター、漫画家、挿絵画家。ボヘミア南部の猟場の番人助手をしていたこともあって動物たちをよく知っており、生き活きとユーモラスな絵を描くことができた。



ロレクと彼の描いた絵画



ティエスノフリーデク

ルドルフ・ティエスノフリーデク(1882-1928)はチェコの作家、詩人、劇作家、ジャーナリスト、翻訳家。